

提出締切：2010年5月20日（木）

2009年度採択 研究推進プログラム「基盤研究」 研究成果報告書

研究代表者	所属機関・職名：産業社会学部・教授 氏名：高木正朗
研究課題	近世東北200年の人口・世帯・耕地の拡大 - 縮小プロセス復元 1643～1870年動態の歴史人口学的解明

I. 研究計画の概要

研究の計画について、概要を記入ください。

日本近世は人口指標で見れば、明らかに現在の開発途上国の水準にあった。それ故、「マルサスの罠」（食糧にみあう人口規模への、循環的な圧縮）の克服は、明治期以後だった。その視点で近世文書群を見ると、そこには食糧の安定確保と貧困克服を目指す日本人の、不断の苦闘が記録されている。この記録を分析・再構築すれば、われわれは途上国の内発的発展論の構築に資する成果をえる見込みがあると考えた。以上の着想から、以下の萌芽的計画（4点）をたてた。

村絵図の入手（19世紀初頭の村絵図を高画素デジタルカメラで撮影）

検地帳の入手（17世紀中期の検地帳を、コピーで入手）

人別帳の入手（17世紀中期以後の未収集人別帳の所在調査をし、撮影を依頼し入手）

Power point slide 作成（不十分ながら基盤史料3点が揃っている3ヶ村について、試験的作業に着手。以上により、小農創出（大規模世帯の解体）政策→人口増加→農地開発→人口増加→可耕地限界→人口プラトー化→人口制限というコースを仮定・検証する。

II. 研究成果の概要

研究成果について、概要を記入ください。

本研究の学術的特色は、概念的には「稲作前線」に、史料的には19世紀初頭の（集落内の1軒1軒の家を記載した）「村絵図」にある。前者（稲作前線）は、17～19世紀200年間の耕作（家）を検地帳・人別帳から年次毎に抽出し、それをデジタル絵図上の家とマッチング（同定）しpower point slideを作成、それらを「スライドショー」で視覚化・復元して得られる、と仮定した。その結果、まだ試行的水準にあるものの、仮説3点にほぼみあう結果が得られた。

第1期＝17世紀中期～末期（谷筋開拓）。この時期の稲作前線は谷筋を遡上、地力・日照が劣悪だが、取水と肥培管理が容易な地域・地区に移動・拡大した。

第2期＝18世紀初期～中期（準平場・湿地開拓）。この時期の稲作前線は谷筋を下降、稲作の矛盾的契機（排水/取水）を克服し、徐々に乾田地区を拡大した。

第3期＝18世紀中期～19世紀（開拓停滞）。この時期の稲作前線は適地消滅のため停滞・固定、集約化・追加的労働力の投入による既存耕地の維持・保全が一般化した。

今後この作業を同一地域に所在する10以上の集落でおこなえば、より確実な結果がえられると推測できる。

本ページはホームページに公開いたします。1ページに収めてください。